

シリーズ 市民美術展入賞作品紹介 わたしの作品

今回から、第四十二回鳥取市民美術展覧会（六月二十二日～二十九日、鳥取県立博物館）で入賞した作品を紹介していきます。

同じこの美術展には、県東部から日本画、書道、工芸、彫刻、洋画、版画、デザイン、写真の八部門に三百五十四点の応募があり、市展賞に二十点、協賛団体賞に五点が選ばれました。今年も昨年と同様、技術レベルの向上と熱意がうかがえる作品が多数みられました。

なお、このシリーズでは、初めて入選された人を紹介させていただきます。



【洋画】市展賞
絵のあるところ



【賀露町南4丁目】
中本二一さん

絵を描き始めて四十年ぐらいいになります。今回の作品は、以前から気に入っていた喫茶店の一場面を描いたものです。店主にお願いして閉店日に店に入れさせてもらい、描きました。これからも、生活の中で、ほのぼのとした情景や、くつろぎを感じる空間を描いていきたいと思えます。

市民図書館の
司書が調べます

まちで見つけた「なんでだろう？」

8月16日に開かれる夏祭りを「しゃんしゃん祭」って
いうの、
なんでだろう？



「鳥取しゃんしゃん祭」がスタートしたのは昭和四十年八月十六日のことです。市民がそろって楽しめる新しい祭りをという当時の市長・高田勇氏の発案で誕生しました。名付け親は山脇豪（行徳）、藤井愷夫（南町）の両氏。その年の三月、公募された四十六点の名称の中から選ばれました。由来については、市の商工観光部長だった久林肇氏は著書『しゃんしゃん祭物語』（平成九年）の中で、「シャーンシャーンという鈴の音と、街地の温泉で沸く湯がシャーンシャーンと鳴る音から「しゃんしゃん」が取られた」と紹介しておられます。山脇・藤井

両氏とも故人なので直接お話を伺うことができませんでしたが、「温泉で沸く湯がシャーンシャーンと鳴る音」という命名の背景には「きなんせ節」が影響していたのではないのでしょうか。

「街に温泉がシャーンシャーン沸いて」という歌詞で知られる「きなんせ節」は、昭和二十六年に発表されています。作詞者は「貝殻節」の作者としても有名な松本穰菓子（本名・儀範）氏です。氏の著書『ふるさとの民謡』（昭和四十三年、鳥取郷土文化研究会・発行）には「キナンセ節生い立ちの記」として数々のエピソードが綴られています。「きなんせ節」はもともと「鳥取新温泉小唄」として企画され、観光客の旅情を慰めるため鳥取駅のホームで列車の停車中に流されていたのが、婦人会のレクリエーションなどを通じて市民の間に広まっていったのだそうです。

また、「しゃんしゃん祭」が始まる前年の九月には、市庁舎の完成を祝う落成式において「きなんせ節」に振り付けられた新たな傘踊りも披露されています。伝統芸能である「因幡の傘踊り」を誰でも踊れるようにと、横枕の高山柳蔵氏がアレンジしたものでした。「しゃんしゃん祭」の名付け親である山脇、藤井両氏の脳裏にも、軽やかな鈴の音とともに「きなんせ節」の一節がこだましていたのではないのでしょうか。

ちなみに、国語辞典で「しゃんしゃん」という言葉を引くと、「①鈴などの鳴る音」「②湯が盛んに沸き立つさま」という意味とともに、「③元気に立ち働くさま」という解釈も見られます。

鳥取の夏を彩る風物詩として暮らしの一部にもなっている「鳥取しゃんしゃん祭」。市民そろって「しゃんしゃん」と、元気に楽しみたいですね。

※このコーナーでは、みなさんからの「なんでだろう？」を募集しています。秘書広報課（☎20-3159）へ。